



# KIESS MailNews

2013年1月号

## 巻頭言

紙幣大增刷で一気に好景気

内藤 正明 ..... 1

## Report

過去への眼差し：博物館大国ドイツを旅して

荒田 鉄二 ..... 3

## KIESS 活動報告

12月8日 KIESS 土曜倶楽部

佐藤 秀一 ..... 9

## 連携団体・SCS 活動報告

鈴鹿コミュニティ活動の展開

片山 弘子 ..... 12

## 事務局からのお知らせ

今後の予定・原稿募集

KIESS 事務局 ..... 14

## 巻頭言

# 紙幣大增刷で一気に好景気

KIESS 代表理事 内藤 正明

### 政権交替と経済

政権が変わって、一気に景気が良くなってきたようです。長く国民が待ち望んでいた「景気回復」がたちまち現実したとすると、自民党政権はさすが、それに比べて民主党は何だったのか、ということになる……のでしょうか。

では、魔法のように一気に景気が“良くなった感”が出てきたのは何でしょう。それは、国債の大增刷とそれを日銀が引き受けると決めたこと、そしてその金を大規模な公共投資で全国にばら撒く、という政策を打ち出したことでしょう。実際はまだ実行されていないのに、すでに景気を示す数字が上がっているのは、“景気”というのは文字通り「気」のもので、皆がその

気になれば良いというのが分かります。よく株式市場で、「…の材料を囓って、\*\*株が値を上げました。」などという表現を聞いて、“祭りのお囃子ではあるまいし…”とと思っていましたが、まさにそのものだったのです。中身が無くても囃し立てれば値が上がる。政治のことを昔は、「まつりごと（政）」と呼びましたが、政治は祭祀と同じことだったようですから…。

### お金増刷の功罪

お金をたくさん印刷して社会にばらまけば、会社は景気が良くなって従業員の給料が増え、税金をたくさん納めるので、国の税収も増えてまた公共投資ができる、という好循環が起こるといふ政策のイラストがテ

レビのパネルで見せられていました。この理屈がイラスト通りならことは簡単で、民主党でも出来たはずなのに、なぜしなかったのでしょうか。それは、1月8日の新聞記事が示唆しています。つまり、「借金頼みの大盤振る舞いに経済界は沸き立つが、かつての自公連立政権時代を彷彿とさせる“先祖帰り”を懸念する声も出ている。」とする内容です。この“懸念”の中身はなんでしょうか。素人なりにこのことを考えてみると、これには二つの面があると思われます。

一つは金の面からの課題ですが、これは言うまでもなくいま国の借金と言われるものが膨大に膨らんでいるので、さらに金を刷ってばらまけば借金が積み上がるからです。借金の問題の一つは、そのツケは誰が払うかです。いまの投資が将来の資産として役立ち、ただの借金ではなくそれが富を生めば、今の投資が将来世代の豊かさを支えてくれるかもしれません。これからの公共投資がそのようなものであればいいわけですが、果たしてそうでしょうか。これまでのリポート開発がその典型ですが、いまでは道路、上下水道、ダムなどの公共施設が、その維持管理に巨額な金を要する不良債権となっている事例が多いようでは、子孫に富を生むより負担を負わせることになりはしないでしょうか？

そもそもこの借金は、年寄りが過去に稼いだ貯蓄から借りたものですが、どうせまた円を印刷して返せば文句は言わない。その場合は金が溢れて（インフレになって）お金の価値が下がるから国民は文句を言うはずですが、そこがデフレの中にある我が国では問題にはならないだろうという有り難い予想ですかね。もし、それが外国からの借金であれば、円を印刷して返すことができないので、ギリシャやスペインのように問題が深刻になってくるのでしょうか。

### 「アベノミクス」の議論

この安倍さんの政策は「アベノミクス」と呼ばれて支持されているようですが、これについてネットの情報では、ノーベル経済学賞受賞のグラーグマン氏の、以下のようなコメントが紹介されています。それは、「アベは経済政策にほとんど関心を持っていないが、そのトンデモ政策が結果的に正しいかもしれない」、「アベノミクスは試してみる価値はあるかもしれない。もし、実験台になる覚悟があれば…」というものです。また、日本の経済学者の間でも同様の議論がすでに交わされているとのこと。

以上の僅かな議論を見ても、経済というのはそれを

専門にしている人達でさえも、言うことが大きく違っているの、門外漢にはその真偽が分からないのも無理はないと、いまさらながら思わずにはおれません。金さえ多く流れて皆が儲かるというのは結構なことなのですが、どうもそうはいかないかもしれないという専門家がいるということですね。仮にそこそこ金が回り始めたとして、後はその金がどこまで公平に分配されるかという社会的な課題があることも気をつけないといけません。

しかし、このような金の面の難しい議論を十分理解ができなくても、我々環境問題を議論してきた工学屋から見て、最も納得しがたい問題は、金の流れがあれば必ずそれとは反対の方向に、モノ（とサービス）が流れることが、議論の中に出てこないことです。そのことはすでに「エコロジー経済学」で以前から問題提起されてきたはずですが、資源やエネルギー、それに環境の容量は無限であるという前提で議論してきた「正統派経済学」なるものを信奉する人達には、そのような主張を無視してきた、または気も付かなかつたのかもしれませんが、もしくは、気付かないほうが得だという人達が多いというのが本当のところでしょうか。

### 余りに難しい経済の論理

というようなことで、門外漢が論じるには経済は余りに理解の困難な世界であることが、このたびのアベノミクス議論から分かってきました。筆者の今回の論旨も間違いだらけかもしれないので、大方の指摘を期待しますが、これ以降の話に入ると、いよいよ経済のことをもう少しともに学んで論じなければならなくなります。ということなので、これは次号に続く…として時間を稼いで、その間に勉強をさせてもらいたいと思います。そして、行き着く先に「幸せ経済学」が控えているというシナリオですが、果たしてうまくたどり着けるのでしょうか。乞うご期待というところです。

（ないとう まさあき：KIESS 代表理事，京都大学名誉教授，滋賀県琵琶湖環境科学センター長）

Report

# 過去への眼差し：博物館大国ドイツを旅して

KIESS 事務局長 荒田 鉄二



ペルガモン博物館のイシュタル門（2007年撮影）

昨年（2012年）の秋にドイツに行く機会がありました。その時に感じたのが、ドイツはいたるところに博物館が多く、しかもそれが観光資源になっているということでした。今回は、以前に訪問したものも含めて、幾つかの博物館とドイツの博物館事情を紹介したいと思います。

## 負の歴史を伝える博物館

ベルリンの博物館といえば、博物館島にあるペルガモン博物館、新博物館、ボーデ博物館、旧ナショナルギャラリー、旧博物館などが有名でしょう。しかし、この他にもベルリンにはDDR博物館や壁博物館など、ドイツならではの博物館が多数あります。DDR博物館は旧東ドイツの日常生活に焦点を当てた博物館で、入口す





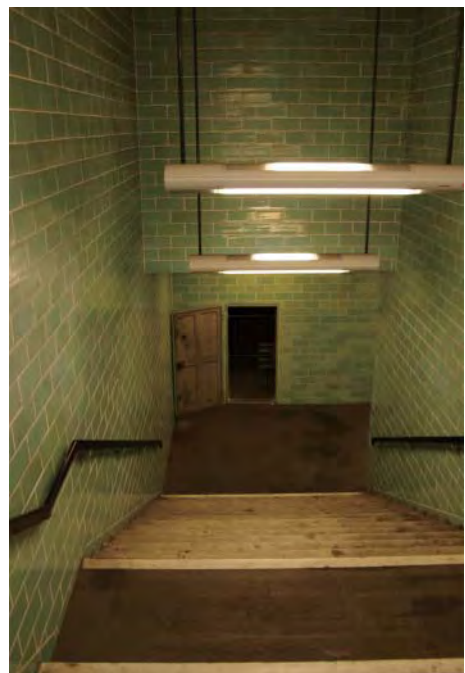
旧東ドイツの国民車トラバント（ドレスデンで2007年撮影）

ぐのところ展示されているトラバントの他、レトロなデザインの旧東ドイツブランドの日用品や家電製品が展示されており、それらを通して旧東ドイツの日常生活を体験できるようになっています。一方、壁博物館はベルリンの壁に関するシリアスな博物館で、壁建設の様子から西側に脱出するために使われた気球など、ベルリンの壁にまつわる様々な資料や映像が展示されており、壁による分断の悲劇を伝える事がテーマとなっています。

この壁博物館に限らず、負の歴史を伝える博物館が多いこともドイツの特徴ではないかと思えます。まだ行ったことはないのですが、ベルリンにあった旧東ドイツ国家保安省（秘密警察：略称シュタージ）の本部は、シュタージ・ミュージアムとして公開されています。東西ドイツのドイツ統一期に大統領だったワイツゼッカー氏は、ドイツ降伏40周年に当たる1985年5月8日の連邦議会における演説で、「過去に眼を閉ざす者は、未来に対しても盲目となる」と言ったそうですが、ドイツにはナチスの犯罪行為に関する博物館が数多くあります。

昨秋に訪問した中で最もユニークだったのがベルリンの地下世界博物館（Das Berliner Unterwelten-Museum）です。これは第二次世界大戦期の防空壕（ブunker：Bunker）を博物館にしたもので、ベルリン地下世界協会という民間非営利団体が運営しています。この博物館の見学は5つほどあるガイド付きツアーのみで、私は約90分間のツアー1に参加しました。ガイドの説明によると、ヒトラーはベルリンが実際に爆撃されるとは考えておらず、防空壕の建設は国民に対して戦争の危機を煽ると同時に安心させるための政治的プロパガンダだったとのことで、構造的にも爆弾の

直撃に耐えるようにはなっていませんでした。また、ベルリン全体の防空壕の収容人数も人口の10%程度しかありませんでした。このため、ベルリンが実際に爆撃されると、防空壕は大混雑になりました。このような防空壕を管理するため、各所の防空壕にはブunkerポリスと呼ばれる人たちが配置され、防空壕の扉の開け閉めや避難者の管理・誘導に当たっていました。ブunkerポリスになったのは、ナチスの支持者ではあるが戦場に行くには年を取りすぎた老人たちでした。防空壕内は、子供連れの母親のための部屋など幾つかの区画に分かれていて、それがトンネルで結ばれています。そのような区画の1つにブunkerポリス待機室があり、その壁には光を吸収して蓄える事の出来る塗料が塗られていました。このため平常時に電灯を点けて壁に光を蓄えておけば、爆撃で停電しても壁が光る事により1時間程度は部屋を明るく保てたそうです。驚いたのは、60年以上経った現在も、この塗料が効果を発揮していることで、ツアーの途中で参加者の1人に壁際に両手を挙げて立ってもらい、目をつぶってもらってからカメラ用のストロボを光らせ、それから部屋の電気を消すと、光を発する壁に両手を挙げた参加者の陰が映っていました。ガイド付きツアーのチケット売り場は地下鉄ゲズントブルンネン駅の南側出口を出てすぐのところであり、ベルリン地下世界博物館への入口は、そこから地下鉄のホームへ向かって下りていく階段の途中にある何の変哲もない鉄の扉でした。入るときには気が付



地下鉄の階段途中にあるベルリン地下世界博物館入り口（2012年撮影）



ルール博物館入口正面の建物（2012年撮影）



ランメルスベルク鉱山のガイドツアーの様子（2012年撮影）



ブロッケン山頂近くの霧の中を走るハルツ狭軌鉄道（2012年撮影）



霧のブロッケン山頂（2012年撮影）

かなかったのですが、出てから振り返って見ると、「ベルリン地下世界」と小さく表示してありました。

### 産業遺産の博物館

産業遺産関係の博物館が多いのもドイツの特徴といえるでしょう。昨秋はドイツ西部のエッセンにあるルール博物館とドイツ中部ハルツ地方の Goslar にあるランメルスベルク鉱山博物館を訪問しました。

エッセンはドイツの鉄鋼王ともいえるクルップ財閥の本拠地で、ルール工業地帯の中心都市として発展しました。しかし、石炭・鉄鋼産業の斜陽化と共に地域全体が衰退の道を辿って行きました。このため、エッセン市は「石炭と鉄のまち」からの脱却を模索することとなり、そこで力を入れた分野の一つが観光でした。ルール博物館は、エッセン最後の炭鉱として1986年まで操業していたツォルフェライン炭鉱の跡地を利用したもので、入り口の正面には、バウハウス様式で建てられ「世界で最も美しい炭鉱」といわれた炭鉱の建物がそびえ立っています。ツォルフェライン炭鉱跡は産

業遺産として世界遺産に登録されており、ガイド付きのツアーでかつての炭鉱施設を見学することができます。残念ながらツアーはドイツ語のみのため参加しなかったのですが、ガイドはかつて実際に炭鉱で働いていたシニアの方が務めていました。博物館内にはルール地方の自然、歴史、文化を展示したフロアもあり、朝から多数の見学者が訪れていました。

人口4万人ほどの Goslar は、10世紀頃から鉱山のまちとして繁栄してきました。その繁栄を支えたのが1988年まで操業を続けていたランメルスベルク鉱山でした。ここでは、作業用トロッコに乗って鉱山に入り、閉山近くまで採掘の行われていた坑道を見学するツアーに参加しました。このガイドもかつて実際に鉱山で働いていたシニアの方が勤めていたのですが、その声の大きさにビックリしました。ツアーの途中で岩にダイナマイトを埋め込むための穴をあける削岩機を動かす実演があり、それでガイドの声の大きさに納得がきました。削岩機に限らず鉱山内で使われる機械の音はもの凄い音で、長年鉱山で働いていると、耳





ダニエルの塔から見たネルトリンゲンの町（2012年撮影）

をヘッドホンのようなもので覆って保護しても次第に耳が遠くなり、自然と話し声も大きくなってしまおうのだと思います。このランメスベルク鉱山もゴスラーの旧市街とともにユネスコの世界遺産に登録されています。

#### 小さなまちの博物館

ゴスラーは小さなまちですが、それでもランメルスベルクの他に、メンヒェハウス（近代美術館）、楽器と人形博物館、ゴスラー博物館（ハルツ地方の自然と歴史を展示）、ツヴィンガー博物館（中世の武具や拷問具を展示）などの博物館があります。そしてハルツカードという地域カードを買えば、これらの博物館がフリーパスになります。ハルツカードには48時間用（27ユーロ）と4日間用（54ユーロ）があり、私は48時間用を買ったのですが、後で気づいてみると4日間用の方が得でした。このカードはハルツ地方の広い範囲で使う事が出来ます。私は隣のヴェルニゲローデから蒸気機関車の引くハルツ狭軌鉄道に乗ってブロッケン現象で有名なブロッケン山頂まで行ったのですが、4日間用を買えばハルツ狭軌鉄道（往復29ユーロ）もフリーとなります。もし鉄道ファンでハルツ狭軌鉄道に乗ろうという人がいたら、4日間用のハルツカードを買う

ことをお勧めします。ブロッケン山の山頂にはブロッケン山を含むハルツ地方の自然や魔女伝説に関わる歴史等を展示したブロッケン博物館があります。

次はドイツ南部のロマンチック街道沿いにある人口2万人弱の小さな町、ネルトリンゲンです。ネルトリンゲンには町を囲む円形の城壁が完全な形で残っており、中世都市の姿を今に伝える貴重な存在です。この町全体が博物館ともいえるネルトリンゲンは地形的にも貴重な存在で、周辺1,800km<sup>2</sup>のエリアがジオパーク（Geopark Ries）となっています。それはネルトリンゲンが1500万年前に隕石が衝突して出来た直径25kmのクレーターの中心近くにあるためで、城壁に囲まれた旧市街の中心にある聖ゲオルク教会の塔（ダニエルの塔）に登ると、クレーターであるリース盆地全体を見渡す事が出来ます。アメリカのアポロ14号と17号の宇宙飛行士もクレーターの地形を学ぶトレーニングをネルトリンゲン周辺で受けたそうで、市内のバルティンガー門近くの城壁沿いにあるリースクレーター博物館（Rieskrater-Museum）には、アポロが持ち帰った月の石が展示されています。ネルトリンゲンにはこの他に、考古学的資料や市の歴史、芸術作品を展示した市博物館（Stadtmuseum）があるのですが、このような博物館はどの町にも必ずあります。



画家のデューラーが住んでいたデューラーハウス（2012年撮影）



ナチの記録を保管しているドク・ツェントルム（2012年撮影）

### 博物館を観光に活かす工夫

博物館の多いドイツでは、博物館を観光に生かす工夫もされています。画家のデューラーで有名なニュルンベルク（人口50万人）では、観光客向けに2日間有効のニュルンベルクカード（21ユーロ）があり、これを買えば市内の約50の美術館・博物館と市内交通（路面電車、地下鉄、バス）が2日間フリーパスになります。私はこれを使って1日目にカーザープルク城、デューラーハウス、ゲルマン国立博物館を見学し、2日目にはドク・ツェントルム（Doku-Zentrum）とDB博物館（鉄道博物館）を見学しました。ドク・ツェ

ントルムというのはドキュメント・センターという意味で、ナチの犯罪行為に関わる記録が保存されているところです。場所はニュルンベルク中央駅から路面電車で10分ほどのところで、かつてのナチ党大会が開催された会場の跡地にあります。

ドイツでは、ハルツカードやニュルンベルクカードのような地域カードがそれぞれの地域で発行されていて、それで美術館・博物館がフリーパスになるだけでなく、多くの場合に市内の公共交通がフリーパスまたは割引になります。このようにドイツでは、博物館を観光資源として活かす工夫がされており、これは日本でも取り入れていいように思いました。私の住む鳥取



県には、県内の路線バスが3日間乗り放題になる「鳥取藩のりあいばす乗放題手形」（1800円）というのがあるのですが、これに美術館・博物館のフリーパスを付けたら、クルマに乗らない私のような人間にはかなり魅力的だと思います。

### 誇りとトラウマ

ドイツ政府観光局の日本語ホームページによると、ドイツには4,000以上の博物館・美術館があるとのこと。これに対し、日本の博物館数は、政府の「社会教育調査」によれば2008年現在で1,248館となっています。2011年の日本の人口が約1億2,800万人であったのに対し、同年のドイツの人口は約8,200万人でした。ここからドイツの博物館数を4,000として人口100万人当たりの博物館数を計算すると、ドイツは48.8館、日本は9.75館となり、人口当たりではドイツの方が日本より5倍ほど博物館が多いことになります。

それでは、どうしてドイツには博物館が多いのでしょうか。一つの理由としては、北ヨーロッパに位置し寒さの厳しいドイツでは、冬には屋内で過ごせる博物館・美術館が重要な余暇空間になるということがあると思います。

そういう理由があるにしても、ドイツに行って感じるのが地域の歴史を伝える小さな博物館が多いということです。ドイツは、スペイン、イギリス、フランスなどに比べれば近代的な国民国家に統一されるのが遅く、中世以来の領邦国家の連合体である時代が長く続きました。そのような状況下で、地方領主や教会の支配から脱し、神聖ローマ皇帝（ドイツ皇帝）直属の都市として一定の自治権を認められた帝国自由都市が生まれていきました。町を囲む城壁は帝国自由都市の証のようなもので、ネルトリンゲンもそのような帝国自由都市の1つでした。このような町に行くと、たとえ現在は小さな町であったとしても、町の入口の城門や市役所の正面ファサード、観光パンフレットや町の地図など、いたるところに帝国自由都市を意味する“Freie Reichsstadt”あるいは“Reichsfreistadt”という表記を見かけます。これはドイツの人たちが抱いている自分の生まれ育った地域の歴史に対する誇りの現れといえるでしょう。

もう一つ、ドイツで特徴的なのが、強制収容所跡などナチスの戦争犯罪に関連する博物館の多いことです。エックハルト・ハーンさんは、昨年5月に鈴鹿で開催されたシンポジウムで「フクシマとドイツのエネル



ハルツカードとニュルンベルクカード

ギーシフト」という講演をされた際に、ドイツの人たちが一極集中的な巨大システムを避けようとする理由について、「ドイツ人にはナチスの歴史に対するトラウマがある」ということを言っていました。ドイツ人ではない私がこのトラウマを正確に理解しているかどうか自信はないのですが、多分ドイツの人たちは「油断していると、また同じ過ちを犯してしまうかもしれない」という、自分たち自身に向けた恐れを強く抱いているのだと想像しています。そして、過ちをくり返さないための最良の方法は、過去を常に眼前に置くことであるということから、負の歴史を伝える博物館がドイツ全土に数多く作られてきたのだと思います。（穿った見方をすれば、ドイツの人たちはナチスのトラウマから国という単位で自分たちの歴史を誇ることに躊躇いがあるため、それぞれにナチス以前の地域の歴史に誇りを見出しているのかもしれませんが。）

博物館は数が多ければいいというものではなく、中身の質も大切です。この点に関して、私の経験の範囲では、「ドイツで博物館に入ったけど、つまらなかったのですぐに出た」という例はなく、ドイツの博物館は内容的にも充実していました。そして、ドイツの博物館が充実している背景には、良い事も悪い事も含めて自分たちの歴史を次の世代に伝えていこうとする、ドイツの人たちの強い思いがあるように感じました。未来のために過去を大切にする博物館大国ドイツの姿勢には、見習うべきものがあるように思います。

（あらたてつじ：KIESS 事務局長，鳥取環境大学環境学部准教授）



## 活動報告

12月8日 KIESS 土曜倶楽部

# 「京都駅ビルににおける生物多様性に関する試み」

KIESS 事務局 佐藤 秀一



高浦 敬之 氏  
(京都駅ビル開発株式会社)

演 題：京都駅ビルにおける生物多様性に関する試み

講 師：高浦 敬之 (たかうら よしゆき) 氏

(京都駅ビル開発株式会社 常務取締役)

会 場：KIESS 京都事務所

今回は「京都駅ビルにおける生物多様性に関する試み」と題し、京都駅ビル開発株式会社の高浦敬之氏に話題提供をしていただきました。

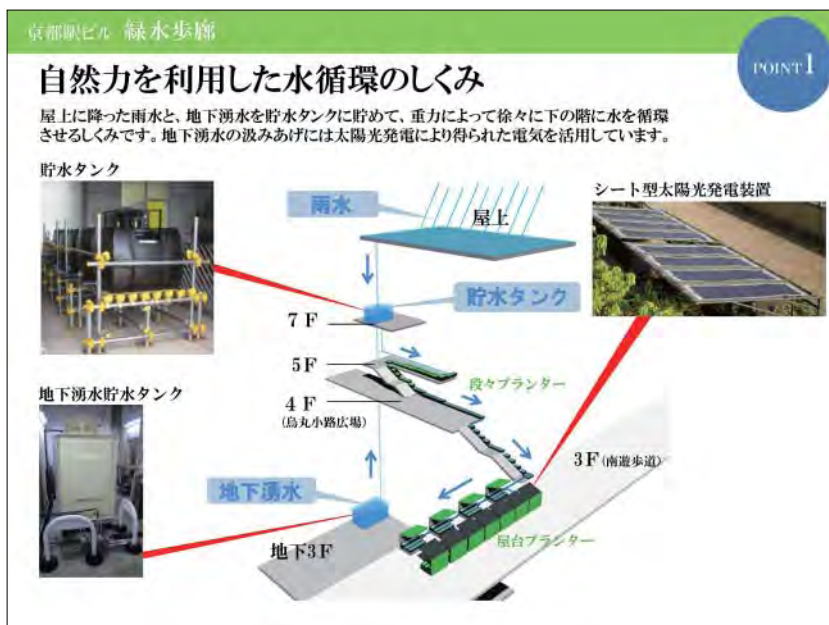
京都駅ビルでは開業 15 周年にあたり「京都駅ビルは環境に対して何ができるか？」と KIESS の内藤代表理事が委員長をつとめる「京都駅ビル未来委員会」を立ち上げ、環境問題への取り組みに関する情報発信をすることになった。

駅ビルの東側と南側の空間で実験展示が始まっている。実験展示は「緑水歩廊」と名づけられ、

- 京都駅ビル内の多様な未利用自然資源（風力、太陽光、雨水、地下湧水など）と、それを活用するためのユニークな技術をアピール
- 駅ビルの中でも回遊が比較的少ない東側と南側の空間を有効活用して、自然との触れ合いの場を提供する

ことを趣旨としている。

緑水歩廊のポイントは、次の通り。



#### 1. 自然力を利用した水循環のしくみ

屋上に降った雨水と、地下湧水を貯水タンクに貯めて、重力によって徐々に下の階に水を循環させるしくみ。地下湧水の汲みあげには太陽光発電により得られた電気を活用している。

2. 京都の原風景を表現した植栽

京都の原風景である、「里山」→「棚田・湿地」→「池沼」といった自然環境を、上層階から下層階にかけて再現している。池沼ゾーンでは、かつて京都の巨椋池に生育していた種を中心に構成している。



3. 段々プランター

階段に設置しやすい形状をしたプランターで、ビル空間の中で効率的な配置が可能。深さに変化があり、多様な植物の生育環境をつくり出すことができる。



4. 屋台プランター

屋根やベンチがついた屋台型のプランターで、緑の憩い空間と同時に、南遊歩道の強い日射しを遮り、植生に適した環境を作りだしている。上屋の部分は着脱が可能で、イベント時には移動や収納性にすぐれたシェルターとしても使用できる。







土曜倶楽部の様子 (2012年12月8日, KIESS 京都事務所にて)

この実験展示により、

- にぎわいの創出
- 生物多様性への関心の高まり

といった波及効果が得られている。

緑水歩廊を起点とした今後の展開として、

- 波及効果のモニタリング (にぎわい、生物多様性、ビル内環境の改善等の効果測定と分析)
- 地元参加によるコミュニティづくり (植栽の手入れ、季節の催し、環境学習等を通じて) などを考えている。



そのほかに、風力発電で点灯させたLEDのあかりが揺らめく「風車の木」と名付けた実験展示もあるそうです。京都駅で乗降される時に、ちょっと立ち寄られてみてはいかがでしょうか。

(さとう しゅういち: KIESS 事務局)

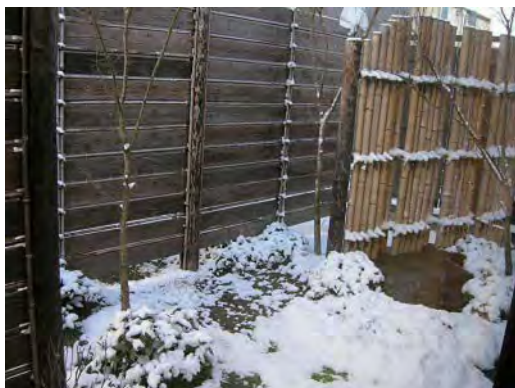


「風車の木」

## 連携団体・SCSの活動報告

# 鈴鹿コミュニティ活動の展開

鈴鹿カルチャーステーション理事 片山 弘子



鈴鹿にも何度か雪が降りました。茶室の庭も雪化粧でまた風情があります。三年目のお正月を迎えて、鈴鹿カルチャーステーション（SCS）はさらに「まちの縁側、まちの学び舎、まちのチャレンジエコステーション」らしくスタートです。

SCSを支えるアズワンコミュニティも、コミュニティビジネスとしての「おふくろさん弁当」や地域通貨の取り組み、里山やまちのはたけ公園での活動など、それぞれがその人らしく生きる、幸福な生き方が出来ることを目的に進んでいることで、年末から新年にかけて、ブラジルや韓国、国内からもたくさんのお見学が続いています。

### まちの縁側として カフェをリニューアル・オープン

これまでもSCSの南側に一応、喫茶・ハイマート（ドイツ語で「ふるさと」の意）を用意していましたが、私たちが十分専念できないまま場が活かされていませんでした。

しかし、ひょんなことから、これまで奈良でカフェを長年経営されてきた方が、アズワンコミュニティの趣旨と方法に賛同されて、ここにその経験を生かした「カフェ・サンスーシ」をオープンすることになりました。サンスーシとはフランス語で「憂いがない」「気楽な」という意味。そんな場になれば、という願いが込められています。

マスターは、大嶋みえさん。パソコンにも精通していて、「パソコンが使える習える喫茶店」としてパソコンも常設し、Wi-Fiも完備。パソコンのことで分からないことがあれば気軽に聞くこともできます。コーヒーはフジエダ珈琲のこだわりの豆を使用した豊かな味わいです。

オープンイベントは、「手作りパン市」「採りたて野菜市」も開催。好評でたくさんのお見学がありました。



サンドイッチセット  
ドリンク付で600円～

(かたやま ひろこ：一般社団法人鈴鹿カルチャーステーション理事)



## 新春のイベントいろいろ



新春1月4日のお餅つき大会、19日の初茶会も、昨年よりさらに参加の方々が増えてきました。地域で、心休まるまちの拠り所として認められてきたようです。

まちの学び舎として、一日てっらこやには大勢の子どもたちがやってきています。街のはたけ公園で作られてきた堆肥を播いて、土づくり。ハウスでは、様々な冬野菜が穫れ、子供たちも収穫を楽しみました。



## 地域の『環境展』に展示 オープニングで、太鼓チームの演奏



日常の里山整備や、子供たちの体験活動などが次第に評価されるようになってきましたが、1月12日から地元密着型ショッピングセンターで開催された環境展にパネル展示で活動紹介をするとともに、SCSの太鼓チーム『清楽』が演奏させてもらいました。太鼓チームの演奏は、こうした市民活動の企画展で演奏を頼まれるようになるなど、地域の人たちに喜ばれています。

## 韓国やブラジルからコミュニティ作りの交流

韓国からは20代～50代の男女13名が、1月17日～20日來訪しました。昨年8月にみえたノンシル人文学校のユ・ギマンさんやウオンさんの呼びかけに、ソウル・京畿道・忠清道・全羅北道などから集まった方々。様々に活動しているようですが、3泊4日、参観や懇談会等、ここに暮らす人達に触れ、それぞれにやさしい社会を感じたようでした。2月26日から韓国で開催されるセミナーに参加する人が現れたり、今度は長期で滞在したいと言う人がいたり、これからの展開が楽しみになってきました。1月末からはサンマウル高校の学生4名が体験交流で滞在します。

またブラジルからはMINOWA夫妻が滞在中で、理念に加えて、特に実際のコミュニティの暮らしを通して、エッセンスとなるものを体で得ていこうとしています。

詳しくはこちら→ <http://goo.gl/PNqL9> (宮地昌幸さんのブログより)

## 事務局からのお知らせ

### KIESS 京都事務所の会議・打ち合わせ利用について

KIESS 会員の皆様!!

京都市内での会議や会合、打ち合わせ等に KIESS 事務所を積極的にご活用下さい。ご利用を希望される方は、KIESS 事務局までメール (ecosoundmail@kiess.org) でお問い合わせ下さい。

### 次回の土曜倶楽部について

次回の土曜倶楽部は 3 月下旬の開催を予定しております。詳細が決まり次第、あらためて連絡させていただきます。

### 投稿のご案内

KIESS MailNews では、会員の皆様からの原稿の投稿を募集しております。以下の注意事項をふまえて、ぜひご投稿ください。

#### 【テーマ】

KIESS 会員に紹介したい活動や報告、KIESS の活動としてやってみたいことの提案。いま関心があること等。

#### 【字数】

1600 字程度 (写真, 図表を含め A4 用紙 2 ~ 3 枚程度を目安としてください)

#### 【媒体】

Word ファイル、テキストファイルなどの電子ファイルで KIESS 事務局 (ecosoundmail@kiess.org) まで電子メールにてお送り下さい。

#### 【注意】

商業目的や個人的な宣伝など KIESS の理念と無関係な内容の投稿は御遠慮下さい。なお、MailNews への掲載がふさわしくないと事務局で判断した場合は掲載をお断りする場合もございますので、ご了承下さい。

### MailNews へのご意見・お問い合わせについて

今回の記載内容への質問やコメントなどがございましたら、KIESS 事務局まで電子メールまたは FAX でお問い合わせください。

e-mail : ecosoundmail@kiess.org

FAX : 075-752-1133

### 事務局のつぶやき



KIESS 事務局 @kiess 1月19日  
新年から節分、今の時期が一番寒いですね。KIESS 事務所は 12 月の寒い中、スタッフ一同で模様変えをしましたが、事務所が温くなることはありません。内藤代表はお得意の壁塗り、部屋が明るくなりました。しかしながら、もう少し温かくなれないかと思う今日この頃です。(つじ)



KIESS 事務局 @kiess 1月31日  
今号のメールニュースから、編集担当が交代しました。それを機にデザインも一新してみたのですが…いかがでしょうか？(いわかわ)

KIESS MailNews 2013 年 1 月号

編集・発行：NPO 法人 循環共生社会システム研究所

〒 606-8386 京都市左京区新丸太町 42

TEL&FAX : 075-752-1133

e-mail : ecosoundmail@kiess.org

http://www.kiess.org/